巻　頭　言

ラホールの春

― 序に代えて ―

会長　太　田　時　男

すぐる３月１８日から３月２２日まで，パキスタンは第二の都市ラホールで，アメリカ・パキスタン合同シンポジウムとして「再生可能エネルギー」がテーマに採上げられ，開催された。

これは，ソ連のアフガニスタン侵攻に対抗し，アメリカ政府がパキスタン援助の一環として企画したもので，費用は主にアメリカ政府が負担した。パキスタン，インド，バングラデイシュ，スリランカ，イラン，中国，ギリシャ，トルコ，バーレン，サウジアラビアなどの近隣諸国のみならず，ギアナ，ペルー，パプアニューギニア，マレーシア，ナイジェリア，チリー，エヂプト，南アなどの途上国３０ケ国からも５００余名の人が集った。講師陣とワークショップのリーダーはアメリカ，パキスタン，カナダ（１名），オーストラリア（１名），エヂプト（１名），日本（筆者，１名）など計２０名で，その旅費，滞在費，日当はすべてアメリカ政府によって賄われた。

カラチには，ともかく，ラホールにはお馴じみの方は少ないと思うし，いろいろな意味で難しい国際状勢や国内経済の渦中にあるパキスタンに７日間滞在し，郊外の寒村などもつぶさに見てきたので，そのあらましを書きとどめておきたい。

ラホールへはデーリー経由で行ったが，デーリーからはフォカー２７というドイツ製４０人乗りのプロペラ双発機が使われているが，これはきわめて，安定した飛行をしていた。ラホールは人口３００万人ほどの大都会で，３月の気候は温暖である。毎日，日の出とともに始まるコーランの祈りが街中にひびきわたり，目が覚める。主会場になったラホール・ヒルトンは先進国のホテルとは何等変ったところがないが，食事は日本人には合わない。鶏と魚が主で，衛生状態への配慮からか，クッキングのしすぎで味気なし，３日目には全く食欲をなくした。また，毎夜，デナーの招待を受けたが，おいしいと思ったのは２１日夜のトルコ公使招待の夕食くらいのものであった。街へでると中国料理の店が幾つもあるが，それも２，３回で飽きるという調子で，何時もながら，日本の食事の素晴らしさを思う。

講義とワークショップは，エネルギー教育，ルーラルエネルギーシステム，バイオマス，水力，地熱，太陽エネルギー，それに，特別に，２次系としての水素エネルギーシステムが加えられ，筆者はＩＡＨＥ代表として，水素エネルギーとエネルギー教育を受持った。講義では金属水素化物利用のエネルギー貯蔵とその農業への応用を中心に１時間の話しをしたが，スライドがスムースに動かず，予定の原稿をはなれて，フリースピーチで１時間の役割を終えた。しかし，質問には的を得たものが多く，何とか実質的に，責任を果せたと自負している。

先進国での会議と相異するところは，第1にスライドやＯＨＰの装備，整備が不十分なこと，第２にバンクチュアルでないこと，第３に「おしゃべり」が多すぎることである。

時間の観念が，実に，いいかげんなことは，２０のモーニングセッションで，筆者が座長をつとめ，テキサスのボックリス教授とマイアミのベゼログルー教授が講義することになっていたが定刻に集ったのは，この３人の他に，イタリー，カナダ，アメリカからの数人だけ，しかも，みんな講師招待者ばかりで肝じんの受講者が集り終えるまで１時間はかかっただろうか。

講演者によっては発表の初めに神に祈る光景も，しばしば，であった。

パキスタンの人々は日本人とみると，ひどく，親しげに寄ってきて，話かける。中には共同研究，留学，学位の世話を申し込む人も幾人かいて困惑した。

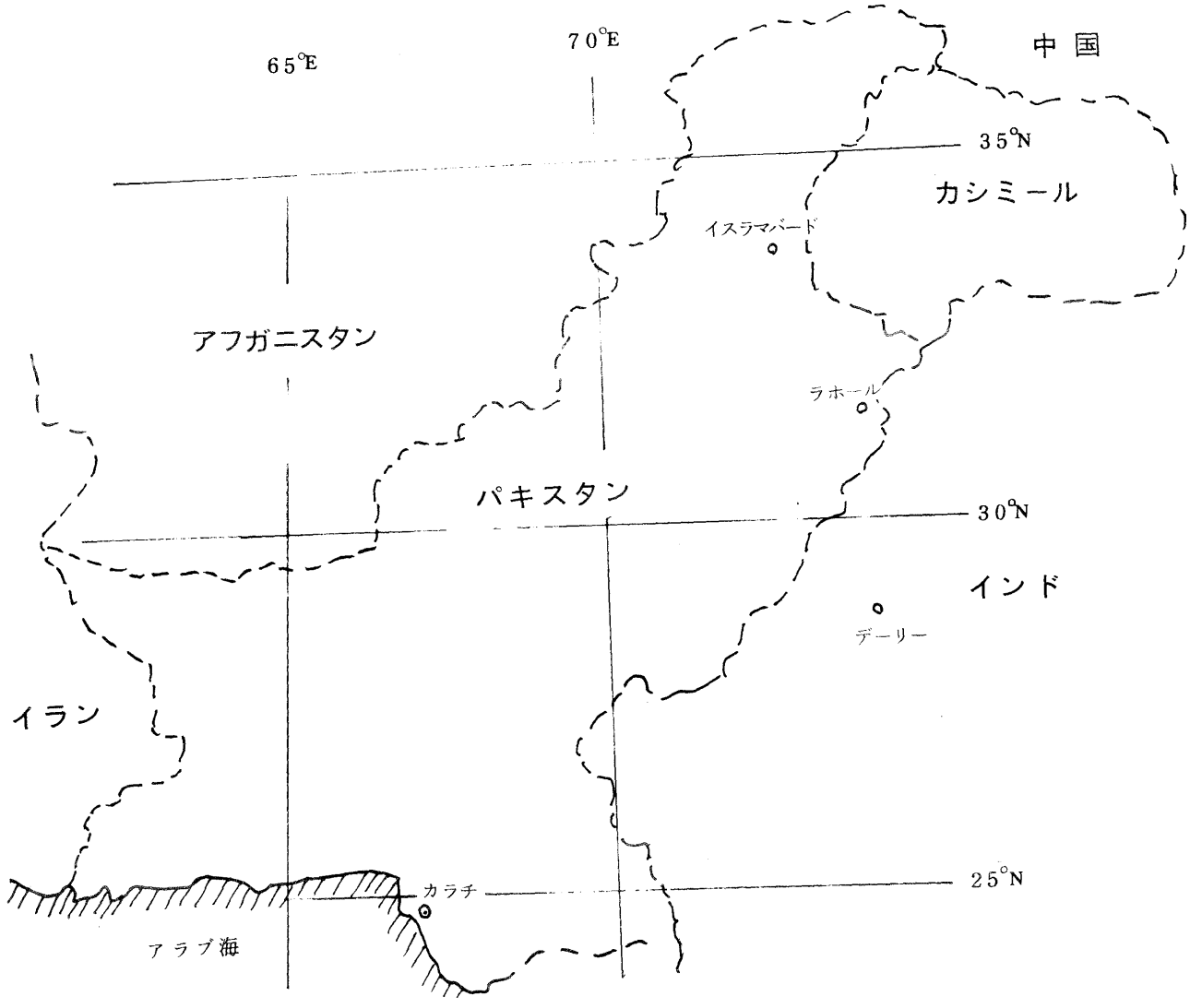
１８日の午前はＰＣＳＩＲ（パキスタン科学・技術庁）が筆者等の講師陣を観光に招待したがお決まりのコースだけだったので，これを不満に思い，２１日には韓国鮮文大学設立準備委員長の伊世元博士とともにタクシーを借り切って郊外の寒村やインドとの国境を見てあるいた。児童34人，教師７人というある小学校は２０畳ほどの小屋に黒板１枚という，江戸時代の寺小屋よりもひどい教室であった。

7,０００万人の中，1,０００万人が人間らしい生活を送っているといわれ，多くの人は，土と練瓦作りの家屋でゴーバーと同居する。衛生上の必要性から，食事は必ず熱を通したものをとる。エネルギーは生きるためのミニマムな要求なのである。このエネルギーはゴーバーの糞を壁に貼って乾して賄う。動物と人間の一線は，まさに，エネルギー（熱）であることを目前に見たものである。

考えてみれば，わが国でも，江戸以前の昔は似た状況にあったと言えよう。それが，どうして，ここまでこられたのであろうか。答は，やはり，科学・技術ということではなかろうか。伊博士は日本の京大（物理）出身の韓国のトップクラスの方であるが，かって，アメリカの国務省が韓国を指導していた大戦直後の時代に，「韓国の工業はパキスタンに見倣え」と言い，実際に，パキスタンを訪れて学んだものだという。いま，韓国の工業の隆盛を思い，伊博士は感きわまって，つくづく，教育の重要さを思うと語っていた。

オイルショックの時は非産油途上国の悲惨さが言われた。しかし，やがて，ＯＰＥＣが援助を決定し，実行してきたため，途上国は一息ついていたし，それが，当り前になっていた。しかし，この３月，ＯＰＥＣの原油値下げが正式に決定するとともに，これらの援助も打切られることになったのである。ラホール滞在中，パキスタン・タイムズはこれを大きく報道していた。

本当の意味での平和は，なかなか，こないようだ，とつくづく思った次第である。


65°E
70°E
中国
35°N
カシミール
イスラマバード
アフガニスタン
ラホール
パキスタン
30°N
インド
デーリー
イラン
25°N
カラチ
アラブ海